

言語文化教育素材としてのテキスト種ウィット

—ウィットに見るさまざまなドイツ語—

植田 康成

0 はじめに

複数中心言語としてのドイツ語という観点、ドイツ語研究においても、アモンをはじめとする諸研究者の精力的な研究によって、現在ではあまねく認められている。ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン、ルクセンブルクのドイツ語に関する辞典 (Ammon u.a. (Hrsg.) 2005) の刊行によって、この分野に関するアモンの研究は一段落ついたと言ってよいであろう。アモンの辞典の刊行に先立って、オーストリアとドイツのドイツ語の違いに特化した辞典 (Sedlaczek 2004) も刊行された。

本論文は、ドイツ語で語られるウィットを素材に、ウィットの中に見られるさまざまなドイツ語を「変種言語学」(Varietätenlinguistik) の観点から検証することが第1の目的である。そして、そのことによって「ドイツ社会言語学」(Germanistische Soziolinguistik) への手引きとしての論述を行うことが最終目標である。もちろん、ウィットという素材を通して、ドイツ語学習をより興味あるものとすることも狙っている。

本論文の素材となるのは、ドイツ語で語られるウィットの中でも、ドイツ語圏の各地域の住民に関するウィット、いわゆる「地域に関するウィット」(Regionale Witze) である。地域に関するウィットは、とりもなおさず、その地域で話されている方言を取り込んで、地域性を表現しようとしているという理由で、さまざまなドイツ語のあり方を観察するのに最適であると考えられるからである。

とはいいながら、残念ながら、変種言語学という地域変種、社会変種、状況変種、そして最後に発達変種の全てに関するウィットが見つからないわけではない。そういうわけで、ページ数が制限されているという理由からも、本論文は網羅的ではありえない。本論考のとりあえずの目標は、ウィットを素材とするドイツ語のさまざまな言語変種に関する概括的な論述のための枠組みと、具体的な論述例を提示することである。

1 変種言語学 (Varietätenlinguistik) について

伝統的な方言学がその存在基盤としてきたのは、いうまでもなく、さまざまな現象形態のドイツ語が存在するという事実であった。しかし、方言は、あくまでもそれを覆う形での、ドイツ語という言語体系のサブクラスとして捉えられてきた。しかし、ドイツ語それ

自体にも、方言という現象形態を超えて、国家変種というものが認められるということを主張し、そして具体的な調査結果として提示したのが、アモンの一連の研究であった。アモンの国家変種に関する研究は、2つの大きな書物（Ammon 1995 および Ammon u.a. (Hrsg.) 2005）として刊行された。

変種言語学の展開を促す大きな動因となったのは、M・クラインの「複数中心言語としての英語」という考えにもとづく一連の研究であった（Clyne (ed.) 1992）。アモンの研究は、展開の中心が複数存在するという複数中心言語の考えをドイツ語に適用し、ドイツ、オーストリア、スイスにおけるドイツ語をそれぞれの国家変種として捉えたのである。

性差、職業といった要因と並んで、社会集団語（Soziolekte）、状況語（Register）の概念が、社会言語学が展開するにおいて重要な役を果たしてきた。1970年代以後における社会言語学の展開の中で、従来の方言学は空間に関わる変種を扱う分野（areale Linguistik）として位置づけられ、社会言語学の中に取り込まれることになった。

1960年後半から、生成文法という理論的枠組みの中で、言語習得に関する研究は、飛躍的に展開する。第1言語習得（母語習得）、第2言語習得（母語以外の言語）に関する研究から得られた知見が外国語学習研究にも応用されるようになる。中間言語という言語発達上の変種の存在が認知されるようになる。

2 変種を捉える視点

言語変種を捉える視点は、歴史的な変種つまり時間変種（Diachronische Varietäten）、地域変種（Diatopische Varietäten）、国家変種（Nationale Varietäten）、社会変種（Diastratische Varietäten）、状況変種（Diaphasische Varietäten）、発達変種（Diagenetische Varietäten）の5つということになる。

変種（Varietät）という概念は、本来、共時的概念であろうが、本論考ではあえて歴史的概念でもあると理解する。そうするならば、変種を捉える視点は、通時と共時に分かれる。通時的変種は、時間変種ということになる。共時的変種に3つを区別することができる。地域変種あるいは空間的変種と社会変種及び発達変種である。地域あるいは空間的変種の特殊形態、つまり複数の地域変種を覆う形で、標準変種として発達の中心を有する変種が国家変種ということになる。社会変種は、職業語、若者言葉といった狭義の社会変種と状況変種（レジスター）に分かれる。発達変種は、言語発達あるいは言語習得上の変種を意味する。言語習得が個人の生涯を通じてなされるという事実を考慮するならば通時的とも言えるが、現実には言語習得過程に関する研究は共時的と理解されていると思われる。従って、本論考では、発達変種は、共時的変種に属するものとする¹⁾。

3 ウィットに見るさまざまなドイツ語

以下、変種を捉える各視点に従って、ウィットを観察していこう。そして、ウィットの中に見られるさまざまなドイツ語について、説明を加えていくことにする。なお、注記するならば、ウィットに見られるさまざまなドイツ語、それはそのような変種であると一般

に考えられたものであり、どれだけ実証的な調査に基づいているのかについては未決である。マタイヤーのいう意味でのジャルゴーンであるといえるものである²⁾。

3.1 時間変種 (Diachronische Varietäten)

この変種を見ようとするならば、ドイツ語で語られたウィットの歴史をたどることにもなろう。ここでは、ドイツ語の展開の歴史において、ウィットに類する小話が登場してきた時点から、現在に至るまで、時代を追って、それぞれの時代におけるウィットの例を眺めていくことになる。ドイツ語の Witz という語が、テキスト種を意味するようになったのは、ようやく 19 世紀半ば頃とされている。従って、それ以前にさかのぼって、ドイツ語の変種をテキスト種ウィットに探し求めることはできない³⁾。

モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』の第 2 幕第 10 場に次のような一文が出てくる。"Diesmal weiss man deine Taten, Dein Geheimnis ist verraten, Das dein Witz nicht retten kann!" (あんたの仕業だと言うことはわかっているよ。あんたの秘密はばれているよ。逃がられないよ。) このオペラの初演は 1778 年であるので、18 世紀後半のドイツ語ということになる。上の文に見られる "Witz" という語は、機知、悪知恵という意味である。

現時点で手に入れた時間変種を提示しているウィットは、次のものである。当該のウィット集の発行年は 1984 年であるが、ウィットそのものは 1896-1898 の間に発行された雑誌 *Simplicissimus* から収集されている⁴⁾。従って、このウィットに見られるドイツ語は、19 世紀末のドイツ語であるという理由で、その時代のドイツ語の時間変種を提示していると考えてよいだろう。

"Naturgeschichte für Kinder" "Mama, was ist eigentlich der Unterschied zwischen einem Stier und einem Ochsen?" - "Der Stier ist dem kleinen Kälbchen ein Papa, und der Ochse ist der Onkel." (*Simplicissimus* 1984: 103)

お母さんが子供に語っている説明文に出てくる "Der Stier ist dem kleinen Kälbchen ein Papa" という表現が、当時のドイツ語の特徴である。現代ドイツ語であれば、"Der Stier ist der Papa des kleinen Kälbchens" と Genitiv (所有格) を用いて表現するところであるが、かつては Genitiv に代わる表現として Dativ + Nominativ (与格 + 主格) が用いられていたのである。現在もまだ南ドイツの一部の方言では、見られる表現である。主格が不定冠詞を伴っていることに注意されたい。

3.2 地域変種 (Diatopische Varietäten)

地域変種の特殊なケースとして、国家変種を考えることができる。すなわち広義の地域変種と狭義の地域変種が区別可能であり、広義の地域変種に、国家変種と狭義の地域変種が包括されることになる。従って、以下の記述は、国家変種と狭義の地域変種に関する 2 つの節に分かれる。

3.2.1 国家変種 (Nationale Varietäten)

さまざまなドイツ語の実態を見るというのであれば、ドイツ語圏における国家変種の特

徴を見ておく必要があるだろう。以下ではウィットの中にみられるオーストリア、スイス、ドイツにおけるドイツ語変種の特徴を見ていく。

複数中心言語としてのドイツ語と言うとき、その中心となっているのは、ドイツ、オーストリア、スイスであるとされている。従って、それぞれの国家変種が現れているウィットを観察していくことになる。

3.2.1.1 ドイツの国家変種

ドイツ語学習においては、ドイツ連邦共和国で刊行された教科書や辞典が多く使用されている。そのため、ドイツ連邦共和国におけるドイツ語がドイツ語の標準となっている観がある。しかしながら、ドイツ連邦共和国におけるドイツ語に特有の語彙や表現が存在しているのも事実である。ドイツのドイツ語に特有の表現や言い回しは、オーストリアやスイスでもその多くは理解され得る。しかし中には理解されない表現もあるのである。冬期に好まれているジャム入り揚げ菓子の一つに **Berliner** があるが、それはベルリン以外での呼び方であり、当のベルリンでは、単に **Pfannkuchen** (揚げ菓子) である。ついでにいうと、オーストリアでは **Krapfen** と呼ばれている。アモン編集の辞典にはドイツ、スイス、オーストリアにおける固有の表現が表示されて、記載されている。また、セドゥラツェックの辞典には、オーストリア固有の表現がドイツ固有の表現と併記する形で収録されている。高等学校卒業のための試験、それは同時に大学入学資格試験でもあるが、ドイツでは **Abitur**、オーストリアでは **Matura** と呼ばれる。それぞれの国では、対応する語で説明する必要がある。

3.2.1.2 オーストリアの国家変種

オーストリアに関するウィットといえば、ポビー伯爵が登場するウィットであろう。すなわち、かつてのオーストリア・ハンガリー帝国の名残を引きずるキャラクターである。ポビー伯爵は、間抜けだが、憎めない人物である。もちろん彼の口から出てくるドイツ語は、ウィーン訛りのドイツ語である。

Es ist Silverter. Rudi: "Du, das wird ein Unglücksjahr. Fängt ausgerechnet mit einem Freitag an!" Bobby: "No, Rudi, sammer froh, dass es net auch ein dreizehnter ist!" (Köhler (Hrsg.) 1993: 175)

オーストリアのドイツ語は、スイスのドイツ語圏における方言とつながるアレマーニッシュと呼ばれる方言が話される一番西のフォアアルルベルク州を除いて、言語的には南ドイツ、バイエルン方言に属している。それにもかかわらず、ドイツ、バイエルン州の方言とは、かなり異なっている。とりわけウィーンのドイツ語は、特有のアクセントを持っている。ウィーンの街中を歩く人々の話し声で耳につくのは、「ヨー、ヨー」、「ナー、ナー」といった言語音であるが、これはそれぞれ"Ja, Ja", "Nein, Nein"と言っているのである。つまり、一般的にオーストリアのドイツ語では、母音が暗く発音される傾向にある。それはとりわけ母音/a/に顕著である。"machen"が"mochen"に近く発音される。

次のウィットに見られる変種は、オーストリアの国家変種の特徴を示すと同時に、ベルリン方言の特徴を示している。

Ein Berliner läuft als Tourist durch Wien. Er fragt einen Einheimischen nach dem Weg: „He, Sie, Männeken, könn´ Se ma sagen, wo et hier direktemang zum Stephansdom jeht?“ Der Wiener: „Aber mein liaber Freind, kennan S´ des net a bisserl freindlicher sogn?“ Der Berliner schaut ihn erstaunt an und sagt dann: „Nee, da valoof ick mia liba!“ (Herger 2006: 43)

ウィーンの人が、ベルリンからきた観光客の荒っぽい言葉遣いをただしているのだが、その発言 „Aber mein liaber Freind, kennan S´ des net a bisserl freindlicher sogn?“ (もう少し親切な言い方はできないものではないか) の中でとりわけオーストリアのドイツ語を代表していると思われるのは"a bisserl"という部分である。標準ドイツ語では"ein bisschen"がそれに対応する。また"sagen"が"sogn"と表記されているのは、オーストリアのドイツ語の発音を忠実に転写しようとした結果である。

3.2.1.3 スイスの国家変種

人口約700万のスイスでは、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロマン語の4つが話されている。多言語国家として知られている。人口の約半分400万人ほどが、チューリッヒを中心とするドイツ語圏にあって、書き言葉としてはドイツのドイツ語と同質の言語を使用し、話し言葉としてはアレマーニッシュ方言を使用している。

Zwei Berner gehen spazieren. Einer von ihnen ist auf eine Schnecke getreten. Da sagt der andere zu ihm: "Hättest du nicht auf das arme Tierli aufpassen können?" Darauf der andere: "Aber es kam von hinten!" (Köhler (Hrsg.) 1983: 192)

スイスは現在も独立独歩を貫き通してきている永世中立国として知られているが、それ故人々の振る舞いもゆったりとしているというのが、上のウィットの落ちを成している。"Tierli"という語に見られる"-li"という接尾辞がスイスのドイツ語の特徴を代表している。スイスの人名にも多く見られる。標準ドイツ語では"-lein"、"-chen"がこれに対応する。チューリッヒ湖畔の Rapperswil をはじめ、スイスには"-wil"で終わる地名が多いが、これは Äbstestadt (修道院町) の意であり、かつて St. Gallen の領地であったことを意味する。

3.2.2 地域変種 (Diatopische Varietäten)

狭義の地域変種については、方言分布と重ね合わせながら、「地域に関するウィット集」から、それぞれの地域に関する方言が見られるウィットを収集し、おのおのの方言の特徴について説明を加えていくことになる。広義の地域変種の定義に従えば、それぞれの国家変種内部における狭義の地域変種、つまりドイツの各地の方言、オーストリアの各地の方言、スイスの各地の方言が見られるウィットを観察することになる。すなわち、論理的には、以下の論述は3つの節に分かれることになる。しかしながら、本論文では頁の制限上、オーストリア、スイスの各地の地域変種については論述を割愛せざるを得ない。

3.2.2.1 ドイツの諸方言

(ベルリン)

北ドイツの低地方言もさまざまであるが、ベルリン方言もウィットの世界では典型化されている。標準ドイツ語の/gが/j/と発音され、その音変化がベルリン方言であることを示す働きを持たされている。

Bahnhof Zoo. Der eilige Reisende zum Gepäckträger: Sie, wo läßt man sich am besten rasieren?" Der Gepäckträger keineswegs eilig: "Am besten im Jesicht." (Röhrich 1980: 229)

オーストリアの国家変種に関する節(3.2.1.2)で挙げた2番目の例の„He, Sie, Männeken, könn´ Se ma sagen, wo et hier direktemang zum Stephansdom jeht?“という発言にある"\"Männeken"は、ベルリンを含めた北ドイツの代表的語彙とも言える。男の人に対する呼びかけ語であるが、標準ドイツ語の対応語は"\"Männchen"である⁵⁾。

(ザクセン)

緯度的には、ザクセンは、中部ドイツに位置しているといえるだろう。ザクセンの方言の特徴は、無声子音が有声化する点にある。次のウィットは、いずれもその音変化にウィットの落ちが基づいている。過剰修正の例でもある。

Ein sächsischer Vater erzählt: "Mer hadde siebe Gindä, lauter Jungs; wir hadde se nachdem Olphabet heiße. Den erste hadde mer Arnst heiße, de zweide Beder, de dridde Cacharias, und de vierde Deodor. Dann kam de Edipus und de Filipp. Beim siebde, jo, do hadde mer en Fehler gemacht, den hadde mer Gindä geheiße, und wenn mer jetzt rufe 'Gindä', dann komme se alle."
(Koch/Krefeld/Oesterreicher 1997:65)

(ザクセンのある父親が語った。「うちには7人の子供がいる。みんな男の子だ。アルファベットの順に名前を付けたんだ。1番目は、エルンスト(Arnst=Ernst)と名付けた。2番目は、ペーター(Beder=Peter)、3番目はチャハーリアス、4番目はテオドール(Deodor=Theodor)だ。その後は、エディプスとフィリップとくる。ところが、7番目で間違えてしまったんだな、これが。そいつをギュンター(Gindä=Günter)と名付けたんだ。それだもんで、今じゃ、その7番目の息子と呼ぶと、(Günter=Gindär=Kinder)みんながやってくるということになってしまったんだ。)」

(ハノーファー)

標準ドイツ語なるものは、実際は架空のものであるとも言える。一般的にはハノーファーを中心とする地域で話されている言葉が標準ドイツ語に最も近いとされているが、それでも当然この地域の方言を特徴づける語彙や発音が存在している。

Auf dem Lindener Markt in Hannover tritt eine Hausfrau aus besseren Kreisen an den Fischstand: "Sagen Sie mal, haben Sie Aale?" Die Fischfrau, seelenruhig: "Naan, ich häöbe kaane Aale. Ich häöbe Zaat." Da huscht ein verständnisvolles Lächeln über das Gesicht der Käuferin: "Aber Äöle, die haben Sie doch?" "Jäö, die häöb ich." (Koch/Krefeld/Oesterreicher 1997:64)

上のウィットでは、標準ドイツ語とハノーファー地域の方言間のほぼ同音異義の語がウィットの落ちとなっている。ハノーファー地域の方言では Aale は Eile (急ぎ)、Zaat は Zeit、Äöle は Aale である。標準ドイツ語で問いかけられた市場の屋台店で魚を商っている女性は、最初ハノーファー地域の方言として聞き取って"Naan, ich häöbe kaane Aale. Ich häöbe Zaat." (いや、急いではない。時間はある)と答えた。その発言から直ちに買い手のご婦人は、ハノーファー方言と標準ドイツ語の発音の違い、対応関係を理解して、"Aber Äöle, die haben Sie doch?" (ウナギはあるんでしょう?)と問い直しているのである。(バイエルン)

Weshalb ist es in Kanada so einsam? - Weil Kana da ist. (Krüßmann/Hoppe 1999: 257)

バイエルン方言では、標準語の"keiner"が"kana"と発音される。"Weil Kana da ist"は、つまり、"Weil keiner da ist"ということである。Kanada を"keiner da"と分析して理解している。そこにこのウィットの落ちがある。

Ruft ein Bayer beim Bayerischen Rundfunk an: „Bitte, i möchte a Sinfonie bestell'n für mei Frau zum Geburtstag.“ „Möchten Sie a-Moll oder c-Moll?“ „Amol reicht, zeh'mol wär' zuviel!“ (Fischer 1989: 77)

C-Moll は、ハ短調ということであるが、音としては、バイエルン方言の 10 回 (zehn Mal) と同じになってしまう。そこで、農夫は、交響曲は 1 度聞けば十分であり、10 回は多すぎるといっているのである。バイエルン方言では、"Mal"が"Mol"と発音される。

(シュワーベン)

シュワーベン地方の人々は、ウィットの世界では、けちということになっている。そしてまた、些か知恵が足りないとされている。シュワーベン方言は、バイエルン方言とは異なってアレマーニッシュに属する。次のウィットにある'Hen die koi Schnur?'は、標準語で言えば Hat die keine Schnur?"ということである。

Warum heißt das 'Handy' eigentlich Handy? "Weil die Schwaben beim Kauf als erstes fragen: 'Hen die koi Schnur?" (どうしてそもそも「ハンディ」と言うんだ? 「シュワーベンの人が買おうとして、「ハンディはコードがないのか?」と質問したからさ!)

(Koch/Krefeld/Oesterreicher 1997: 62)

3.3 社会変種 (Diastratische Varietäten)

ウィットの分類学は、さまざまな観点から行われているが、職業による分類も広く行われている。たとえば、医者に関するウィット、ぶどう作りのウィットといったものである。しかしながら、そういったウィットは、登場人物の職業に依拠して分類されているだけであり、登場人物たちの言葉遣いを基準にしているわけではない。従って、変種言語学という社会変種の例といえるものがあるのかどうかは確実ではないが、ともかくも個別的に眺めていくことになる。

3.3.1 若者言葉 (Jugendsprache)

若者言葉の特徴は、言語の各レベルにおいてみられるが、とりわけ語彙において目立つと言えるだろう。次のウィットは、お金を意味する語彙だけでなく、発言全体の言い回しが、いわゆるため口となっている点に、落ちがある。

Vater-Tochter-Verhältnis: "Papilein, gibst du deinem Schnuckelchen mal ein paar Märklein?"

"Du bist nun wirklich alt genug, um vernünftig mit deinem Vater zu reden."

"Okay, Alter - schieb mal 'n bißchen Asche rüber, aber dalli!" (Krüßmann/Hoppe 1999: 132) (「パパ、お小遣い、ちょうだい!」「もう子供じゃないのだから、ちゃんとした言葉遣いをしなさい!」「それじゃ、親父、さっさとお足をお出し!」)

3.3.2 状況変種 (Diaphasische Varietäten)

状況変種についても、先ほどの社会変種同様、資料収集の段階において問題がないわけではない。一人の登場人物が、相手や会話の場面によって、言葉を使い分けているといったウィットが見つかるかどうか、はっきりした展望はない。しかしながら、公の言葉遣いと私的な言葉遣いの違い、格式張った言葉遣いとくだけた言葉遣いの落差を落ちとしているようなウィットは、あり得るだろう。

"Gestern bin ich in einem Bus gefahren, in dem lauter Dichter saßen." "Aber, woher willst du denn wissen, dass es sich tatsächlich um Dichter gehandelt hat?" "Nun, weil der Fahrer immer rief: Dichter zusammenrücken" (Kunschmann 2003: 110)

バスの運転手が乗客に「お詰め合わせ願います」といっているのを、「詩人が乗り合わせている」と誤って聞き取っているのだが、バスに乗っているという状況で、運転手が乗客にアナウンスするほぼ決まり切った言い方であるという認識がなされていないのである。状況把握を誤って、言語表現を理解しているのである。

3.4 発達変種 (Diagenetische Varietäten)

言語発達上の変種に関しては、ウィットの世界ではどうなっているのだろうか。どのようなウィットを標的に収集していけばいいのであろうか。まず、考えられるのは、子供や、外国人が登場するウィットであろう。そして、吃音者、言葉の障害を持った人物が登場するウィットということになるうか。

Ein Italiener unterhält sich mit einem Deutschen über die Nacht. Das Wort Mond fällt ihm nicht ein. Schließlich sagt er: "Wissen du Namen von Kumpel Sonne, das machen Nachtschicht?" (Bornheim1983: 52)

イタリア人の発言は、いわば発話ストラテジーの一つといえる。適切な語彙が思い出せないとき、それを説明的に言い換えるのである。その言い換えが、極めてユニークである点にウィットの落ちがある。イタリア人は Mond という語を思い出すことができなかったので、「太陽の仲間で夜勤をするもの」と言い換えたのである。発言自体も、文法的に見ると、過ちを含んでいるが、それはイタリアから来た客員労働者のドイツ語の特徴と考えられているものである。動詞についていえば、変化語尾を付すことはせず、すべて不定詞

ですます、冠詞を省略する、といった現象が見られる。

In Köln hält ein Mantafahrer neben einem Türken und fragt: "Wo jet er denn hier nach Aldi?" Der Türke verbessert: "Zu Aldi." "Wat, is et schon halb sieben?" (Koch/Krefeld/Oesterreicher 1997: 60)

マンタ乗りというのは、かっこいいスポーツ車を乗り回している少々いかれた若者ということになろう。おそらくはトルコ出身の客員労働者のドイツ語に対して、あるステレオタイプ的な理解に基づいて、反応している。トルコ人は"nach Aldi?"（ドイツの格安スーパー）アルディは、どの方がね?）という表現は文法的に過ちで、正しくは"Zu Aldi"というべきだと指摘しているのだが、いかれた若者は「アルディが閉まっている」と理解し、ドイツ人であるにもかかわらず自分の言語能力の至らなさを暴露しているのである。

4 おわりに

本論文では、テキスト種ウィットに見られるさまざまなドイツ語の変種の一部、地域の変種のみを観察することに終わらざるを得なかった。近い将来に可能な限りすべての変種を網羅した論述を改めて行いたい。結果的にひとつの社会言語学入門への足がかりを提示できていたとしたら、本論考の目的は一応果たせたものと考えたい。

5 注釈

- 1) 本論文の本来の構想は、それぞれの変種の例をウィットに見ていこうとするものであるが、ページ数の制約から、本論文では、広義の地域変種のサブクラスとしての国家変種、狭義の地域変種、社会変種、発達変種が見られるテキスト種ウィットの一部のみについてモデル的な論述を行うことになる。
- 2) マタイヤー (Klaus J. Mattheier) が 1994 年、広島大学で行った集中講義は、文学作品を素材として、その中に見られる社会変種について説明を加えていくというものであった。文学作品に見られる若者言葉といっても、それは作家が理解し、手を加えた若者言葉である、という意味で、マタイヤーは"Jargon"という語を導入した。このマタイヤーが提案した「ジャルゴン」を本論文では、テキスト種ウィットに見られるさまざまなドイツ語に適用し、当該の変種についてのステレオタイプ的な理解を反映したものであり、特定の特徴を誇張し、固定的に捉えているものである、と理解する。
- 3) ケーラー編集のウィット集には、「1844 年に最初のドイツ語のウィット新聞"Fliegende Blätter"がミュンヘンで出版された。これによって、ウィットがテキスト種として成立した」(Köhler (Hrsg.) 1993: 266) とある。
- 4) Simplicissimus は、Fliegende Blätter と同じく、ミュンヘンで刊行されていた週刊誌である。従って、このウィット集に見られるドイツ語は、バイエルン方言の特徴を示している。
- 5) グリム童話の中には、低地ドイツ語で語られている物語が、たとえば"Hase und Igel" (ウサギとハリネズミ) をはじめとして、筆者の見る限り少なくとも 16 はある。グリム童話は、ドイツ各地の方言に関する情報も提供してくれる。"Der Wolf und sieben Geißlein" (狼と 7 匹

の子ヤギ)は、"Geißlein"という語が、この物語が南ドイツを舞台としているということを証している。"Hänsel und Gretel" (ヘンゼルとグレーテル)は、"-el"という縮小辞が南ドイツの物語であることを示している。

6 参考文献

Ammon 1995: Ulrich Ammon, *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz Probleme der nationalen Varietäten*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Ammon u.a. 2005: *Variantenwörterbuch des Deutschen. Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Clyne (ed.) 1992: *Pluricentric Languages. Differing Norms in Different Nations*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Dürscheid/Businger (Hrsg.) 2006: Christa Dürscheid/Martin Businger (Hrsg.), *Schweizer Standarddeutsch. Beiträge zur Varietätenlinguistik*. Tübingen: Gunter Narr.

Fischer 1989: Claudia Fischer, *Die besten Witze & Cartoons des Jahres 1989*. Gütersloh: Bertelsmann.

Hägi 2006: Sara Hägi, *Nationale Varietäten im Unterricht Deutsch als Fremdsprache*. Frankfurt u.a.: Peter Lang.

Herger 2006: Mario Herger, *Darüber lacht Wien. Witze, Anekdoten, Kurioses*. Wien: Ueberreuter.

Koch/Krefeld/Oesterreicher 1997: Peter Koch/Thomas Krefeld/Wulf Oesterreicher, *Neues aus Sankt Eiermark. Das kleine Buch der Sprachwitze*. München: Verlag C.H. Beck. (Beck'sche Reihe 1187)

Köhler (Hrsg.) 1993: Peter Köhler (Hrsg.), *Das Witzbuch*. Stuttgart: Philipp Reclam jun. Verlag. (Reclam Universal-Bibliothek Nr. 8946)

Krüßmann/Hoppe 1999: Dieter Krüßmann/Ulrich Hoppe, *1000 Witze zum Totlachen*. München: Wilhelm Heyne Verlag.

Kunschmann 2003: Doris Kunschmann. *Die besten Witze von A-Z*. München: Bassermann.

Röhrich 1980: Lutz Röhrich, *Der Witz. Seine Formen und Funktionen. Mit tausend Beispielen in Wort und Bild*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag (dtv 980)

Sedlaczeck 2004: Robert Sedlaczeck, *Das österreichische Deutsch*. Wien: Verlag Carl Ueberreuter.

Simplicissimus 1984: *Simplicissimus. Humor. Die besten Witze aus den Jahrgängen 1896-1898*. München: Langen Müller.

(本論文は、「科学研究費補助金」(基盤研究(C)、課題番号:17520379、研究課題:言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーその潜在的可能性に関する基盤的研究)による研究成果の一部である。)